

# 海が育んだ鹿児島島の歴史

## ⑥ 近代化をリードした鹿児島

### ■ 集成館事業

日本の近代化は、植民地を求めてアジアに進出してきた西欧列強、その強大な軍事力、特に海上を自由に動き回る砲台を備えた黒船（蒸気軍艦）に脅威を抱き、西欧の科学技術を導入して軍備の近代化・強化を図ったことに始まる。これをリードしたが、長崎防衛を担っていた佐賀藩と、いち早く西欧列強と接した薩摩藩であった。

薩摩藩は、一八四〇年代に武力をちらつかせながら通商を迫るイギリスやフランスの激しい外圧にさらされ、軍備の近代化に着手した。そして嘉永四（一八五二）年に薩摩藩主となった島津斉彬は、この近代化の動きを加速させ、磯（吉野町）に「集成

館」という工場群を築き、ここを核にして製鉄・造船・紡績・化学・ガラス・食品加工・電信など多岐にわたる事業を推進した。これが「集成館事業」である。

嘉永六（一八五三）年のペリー艦隊来航を機に、日本各地で近代化の動きが広がる中で、幕府や他藩の近代化は大砲鑄造や軍艦建造など軍備強化が主であったが、集成館事業では軍事関連だけでなく民需産業の育成、社会基盤の整備にも力が注がれていた。

藩主斉彬が、「大砲や軍艦だけでは日本は守れない。人々に豊かな暮らしを保証して人の和を生み出す。人の和が日本を守る」と考えていたからである。

### ■ ユニークな手法

薩摩藩が近代化に着手した時、日本はまだ鎖国体制下にあった。このため西欧から必要な機械・設備を輸入したり、専門家を招いて指導を仰ぐなど、他の国々が採ったような手法はできなかつた。オランダの専門書をひもといて、西欧の技術を日本の在来技術に置き換え、融合させていくというユニークな手法が採られた。鉄を溶かすために必要な耐火レンガは薩摩焼の技術で製造し、機械はカラクリ技術を応用して動かすという具合である。

薩摩の技術者たちはこのユニークな手法で蒸気機関まで製造している。これを見た長崎海軍伝習所オランダ人教官のカッティンディーケは驚き、

尚古集成館 副館長

まつお ちとし  
松尾 千歳

【プロフィール】

昭和58年鹿児島大学卒。同年、尚古集成館に入館し、学芸係長・文化財課長を経て、平成18年から副館長。島津家や薩摩藩の歴史・文化を研究。福岡県出身。

「本物を見たことがない人が、製造する機械・道具も無い中で造っているためひどいものだった。十二馬力ほどの大きさのものだが、蒸気漏れなどロスが多く二馬力程度しか出ていない。だが、ちゃんと動いている。これを造った人に脱帽する」と書き残している。

未熟なものであったかも知れないが、自分たちの知識・技術で動くものを造っているのである。このような経験があるから、日本が開国して蒸気機関を輸入できるようになった時、薩摩の人たちは部品の一つ一つまでどのような役割を果たすか熟知しており、すぐに使いこなし、簡単な修理・改良ができた。そして、こうした経験が積み重ねられて、今の技術立国へと

繋がっていったのである。

■ **世界遺産へ**

十九世紀、アジア・アフリカ諸国の中で植民地化を免れ、近代化・工業化に成功したのは日本だけである。今その歴史が国内外で注目されている。

特に、書籍を通じて得た西欧の知識と、日本の在来技術を融合させたユニークな近代化の手法が高く評価

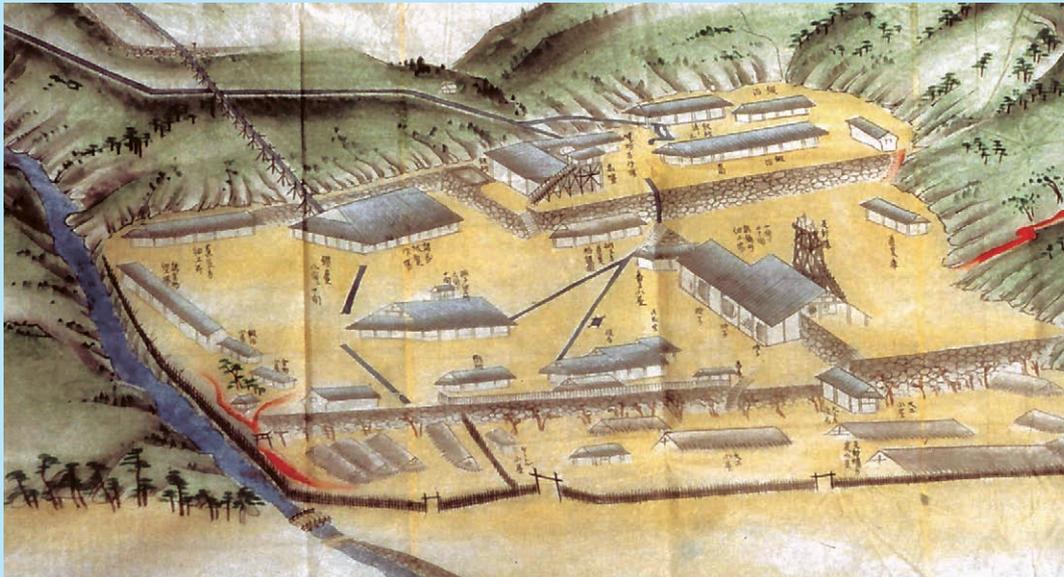
され、集成館跡などを含む九州・山口の近代化産業遺産群は、ユネスコの世界遺産暫定リストに記載され、世界遺産登録を目指している。これまで六回にわたり、「海が育んだ鹿児島の歴史」を紹介してきました

た。お読みいただきありがとうございました。



旧集成館機械工場(現在の尚古集成館)

慶応元(1865)年に竣工した機械工場。蒸気機関や旋盤せんぱんなどの工作機械を備え、金属加工を行っていた。現存する日本最古の洋風工場。

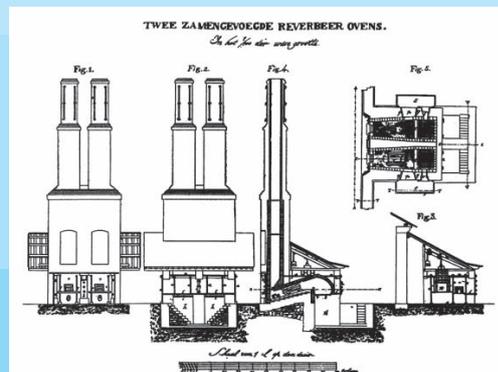


集成館図(「薩州鹿児島見取絵図」(武雄銅島家資料 武雄市蔵)より)／武雄市図書館・歴史資料館提供

安政四(1857)年、薩摩藩の近代化の様子を視察した佐賀藩士千住大之助せんじゅうだいのおすけらが書き残したものの写し。右の煙突状の建物が鉄製砲鑄造のための反射炉、その上が溶鉱炉、中央の一部二階建ての建物がガラス工場、左端は蒸気機関の研究所



旧集成館(反射炉跡)



反射炉図(ヒュゲノン『ルイク国立鑄砲所における鑄造法』)

薩摩藩の技術者たちはこのオランダの書籍を参考に製鉄・造砲事業に取り組んだ。